



〈絵のような〉自然から〈自然絵画〉へ：アレクサンダー・フォン・フンボルトにおける観測／観察／観照

長野，順子

(Citation)

美学芸術学論集, 8:4-15

(Issue Date)

2012-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCOI)

<https://doi.org/10.24546/81003943>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81003943>



〈絵のような〉自然から〈自然絵画〉へ

—アレクサンダー・フォン・フンボルトにおける観測／観察／観照—

長野順子

はじめに

いま「自然」という言葉で私たちは何を思い浮かべるだろうか。心ひかれる美しい自然、脅威を与える破壊的自然、無限に広がる測り知れない自然、いずれにしても自分とは異なる何か捉えがたい存在という漠然たる感じしかないかもしれない。近代以降のヨーロッパでは、自然科学の学問的確立とちょうど平行するように、自然風景は美的観照の対象として描かれ記述されてきた。文化や文明と対比される「自然」は、逆説的ではあるが、むしろある一定の視線が向けられる「文化的」対象となったといつてよい。とくに18世紀に高まってきた風景美学は、「崇高」や「ピクチャレスク」のような典型的な用語によって、叙景詩、風景画、風景庭園にはじまり国内や国外へのツーリズムを枠づけるようになり、広く人々に共有される自然観を育ててきた。現在にまでいたる未知なる土地や自然風景への関心の増大は、ある意味でそれらの延長線上にあるともいえる。

「最後の博物学者」であると同時に未来に向けた「地球学の祖」とも呼ばれるアレクサンダー・フォン・フンボルト (Alexander von Humboldt, 1769-1859) は、18世紀から19世紀への変わり目に行った南アメリカ探検旅行で得た多岐にわたる成果を、自然科学の目と美的(感性的)な自然経験との交差によって表現しようと試みた。科学的なまなざしはつねにある特定の視点からできるだけ正確に自然現象を把握しようとし、観察や測定の結果を記号や数字を媒介して記録しようとするが、その切り取り方には複数の可能性がありうる。それに対して美的(感性的)な捉え方はそれらを含む自然の在り様を一挙に見せるという直観的な視点を与えるように思われるが、それでもそこには視覚的把握以外の温度や湿度、空気感、手触りのようなものは抜け落ちてしまう。一方に科学的なまなざしのもつ明確に限定された視点、そしてその視点の取り方の多様な可能性や恣意性があり、他方に美的(感性的)なものに課せられてきた「多様の統一」や「全体の調和」という理念の孕む思想的・政治的な問題性がある。彼の自然記述における科学と芸術の分裂または融合というテーマについては、これまでも多くの研究者たちが議論を重ねてきた¹。本論ではこ

1 アレクサンダー・フォン・フンボルトは、1799年から1804年までの5年間にわたる南アメリカ赤道地方の探検調査旅行から持ち帰った多領域の成果を、最終的に『新大陸赤道地方旅行』全30巻(35冊1805-34年)の大著としてまとめた。その大半はフランス語で書かれ、詳細な地図や図表とともに博物画や遺跡などの図版が添付されている。*Voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent: fait en 1799, 1800, 1801, 1802, 1803 et 1804 par Al. de Humboldt et A. Bonpland*, Paris, 1805-34, 30 vols. 彼自身によるドイツ語版も含むドイツ語の全集は以下の通り。Beck, Hanno (hrsg.), *Alexander von Humboldt: Studienausgabe in sieben Bände*, Darmstadt: WBG, 1989-97. これまでのフンボルト研究の集大成は、豊富な図版とともに以下の書にまとめられている。Hein, Wolfgang-Hagen (hrsg.), *Alexander von Humboldt, Leben und Werke*, Frankfurt am Main, 1985. フンボルトの伝記については以下の二つの訳書がある。P. ガスカル『探検博物学者フンボルト』沖田吉穂訳、白水社、1989年。D. ボッティング『フンボルト 地球学の開祖』西田治・前田伸人訳、東洋書林、2008年。科学と芸術というテーマに関する最近の研究では以下が挙げられる。Dettelbach, Michael, "The Face of Nature: Precise Measurement, Mapping, and Sensibility in the Work of Alexander von Humboldt", in *Stud. Hist. Phil. Biol. & Biomed. Sci.*, Vol.30, No.4, 1999, Böhme, Hartmut, "Ästhetische Wissenschaft. Aporien der Forschung im Werk Alexander von Humboldts", in *Alexander von Humboldt - Aufbruch in die Moderne*, hrsg. von O. Ette, U. Hermanns, B. M. Scherer, C. Suckow, Akademie Verlag, 2001, Albes, Claudia, "Getreues Abbild oder dichterische Komposition? Zur Darstellung der Natur bei Alexander von Humboldt", in *Darstellbarkeit: Zu einem ästhetisch-philosophischen*

れらを踏まえつつ、「自然」の見せる無限の相貌を単に視覚イメージによるだけでなく全感覚的に捉えようとしたフンボルト独自の試みに焦点を当てる。歴史上の大きな「知的パラダイム変換」²の時期にあって、この人物が18世紀の美的言説を文化的背景にもちながらも新たな自然把握の方法として切り開こうとしていたのはどのようなものだったのか、その膨大な自然記述のいくつかを事例にとりながら考察する。

1. フンボルトの自然記述

1799年6月にスペインのコルヴェット艦ピサロ号は、カナリア諸島のひとつテネリフェ島に寄港した。大西洋上、アフリカ大陸の北西近くに位置するスペイン領カナリア諸島はいずれも火山島であり、なかでも中心のテネリフェ島には標高3700メートルを越えるテイデ山が聳える。南アメリカ探検旅行に向かうために同船でスペインの港を出航したフンボルトとボンブランは、長い航海の途上でまずはこのテネリフェ島に上陸、活火山テイデ峰の山頂に登山した。この島での数日間の滞在と行程をふり返り、この土地の植生について述べ、火山のクレーターの大きさや地質学上の所見を披歴するなかで、フンボルトは次のような言葉を記している。

テネリフェ島の火山の頂への旅が興味深いのは、単に私たちの科学的調査の対象となる現象が多いという理由によるだけでなく、自然のすばらしさを強く感じる人に供された絵のような美しさ (les beautés pittoresques) による魅力がさらに大きいからである。こうした感動を描写するのはむずかしい課題であって、何か明確にできないものをもつだけに、それは一層強く作用しているのである。……旅行者が、地球上で最高の頂、大河の瀑布、アンデスの曲がりくねった谷について記述しようとするとき、彼は単調な賞賛の表現で読者を疲れさせるおそれがある。私がこの旅行記で企てた計画にふさわしいのは、各地域の独特の性格 (le caractère particulier) を明示することであると思われる。景観の個々の特徴を描出し、それらを相互に比較して、壮大な自然絵画 (le grand tableau de la nature) が私たちに供する悦びの源泉をこの種の分析によって発見しようとするればそれだけ、その景観の相貌 (la physionomie du paysage) が一層明らかに呈示されることになる。

Problem um 1800, hrsg. von C. Albes, u. C. Frey, Königshausen & Neumann, 2003, Mattos, Claudia, "Landscape Painting Between Art and Science", in *Alexander von Humboldt From the Americas to the Cosmos*, coordinated by R. Erickson, M. A. Font, B. Schwartz, Bildner Center for Western Hemisphere Studies, 2004. またこのテーマの基本的問題については以下の書に教示されるところが大きかった。山野正彦『ドイツ景観論の生成 フンボルトを中心に』古今書院、1998年（とくにIV、V章）。なお以下の一連の研究論文も非常に参考になった。佐原雅通「ドイツ・ロマン派風景画の植生の発見—C.D. フリードリヒ, A.v. フンボルト, C.G. カールスが自然に見た神性—」東海大学紀要外国語教育センター第25輯、2004年、同「科学と芸術の統合—A.v. フンボルトの「自然絵画」とカールスの「地球生命画」におけるエコロジー」東海大学文明研究所編『文明』No.8、2005年、同「地質学とドイツ・ロマン派風景画—A.v. フンボルト, フリードリヒ, カールスにおける科学と芸術—」『文明』No.10、2006年。大きくみて、生氣論に傾くロマン主義者としての往時のフンボルト像に対して、いわゆる'objective turn'(Dettelbach)によって実証的な科学研究の先駆者としての面を強調する動きが強くなったが、最近ではさらに知的ネットワークの重要性を唱えた点や、ホーリズムやエコロジー主義を先取りした点を評価する見直しが起こっている。まさに見る視点によってフンボルト像そのものが多様なく相貌>を現しているといえる。

2 M. フーコー『言葉と物 人文科学の考古学』（渡辺・佐々木訳、新潮社、1966/74年）のとくに第5章「分類すること」を参照。ここではフンボルトその人には触れていないが、古典主義時代の前とその後での博物学の変容から、さらに古典主義を乗り越える新しい時代の自然の捉え方について主にフランスの博物学者たちの軌跡を辿りながら論じられている。なお、フンボルトの用いた当時最新の測定器具については以下を参照。E・ヴァイグル『近代の小道具たち』三島憲一訳、青土社、1990年（XI章 アレクサンダー・フォン・フンボルト あるいは直観の再獲得と喪失）。

フンボルトは1799年から1804年までの5年間にわたる南アメリカ赤道地方の探検調査旅行を終えたあと、20年ものあいだ主としてパリに居住しながらこの調査の成果を整理し、講演や著作を通してそれを発表することに費やした。著作の大半はフランス語で書かれた多岐にわたる——地理学、地質学、気象学、動植物学、民俗学の——調査記録であり、それには多数の図版や図表が添えられている。しかしながら、いわゆる旅行記といえるものは、人々の要請を受けて帰国後10年近く経ってようやく書きはじめられた。それがこの『新大陸赤道地方紀行 (*Relation historique du voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent*)』全3巻であり、そこに記されたのは実際の旅行の前半部に当たるところのみで、最終的には未完成のままに終わっている。大航海時代から18世紀のクックやフォルスターにいたるまでヨーロッパの人々の読書欲をかきたててきた多くの旅行記を、フンボルトは幼い頃より熟読してきたが、当初はそうした通時的な個人的記録を自分で書こうとは思っていなかったのである。実際、この『紀行』全体にわたって単に旅行者の軌跡というよりは、各地での観察や調査結果が詳述されるとともにそれらに関連する別コンテキストでの話題が次々に繰り出される。そこには帰国してから獲得した情報も盛り込まれ、また地球上の他の場所との比較やその後の政治情勢に関する所見なども付け加わっているのである。

上に挙げた文章はこの『紀行』の最初の方に出てくるが、ここにはすでにフンボルトの自然についての語り方を特徴づけるいくつかの要素が現れ出ている。それはまず、この著作の他の箇所にも頻出する「絵のような (*pittoresque*)」という形容詞が、典型的な形で用いられていることである。次に、この旅行記での自分の語り方そのものについてフンボルト自身が反省的、自己意識的であるということ。そして、彼の自然記述一般を通してキータームとなる、景観の「相貌 (*physionomie*)」と「自然絵画 (*le tableau de la nature*)」という二つの概念が、この文章の後半に見られることである。これらの要素は種類や次元は異なるが、相互に絡み合ってフンボルト的な語りを形成しているものである。以下においては、『紀行』の別の箇所や他の著述をも参照しながら、それぞれの要素がどのような意味をもつのかを明らかにしていく。

II. 「ピクチャレスク」な風景

「絵のような (*pittoresque*)」という語は、とくにこの『紀行』の自然描写においては何度も使用されている。全3巻11部29章のうちとくに前半部、はじめて未知の世界に接触したときの新鮮な感動が記されている部分にそれが顕著であるとはいえ、上掲の文章が出てくる第2章だけでもこの語は5回現れる。ドイツ語ではまさしく「絵のような (*malerische*)」という語で置き換えられるこの形容詞は、フンボルトの『紀行』の英訳でも文字通り「ピクチャレスク (*picturesque*)」と訳されている。本来18世紀末のイギリス風景美学において「崇高」と並ぶ主要な美的カテゴリー

3 *Relation historique du voyage aux régions équinoxiales du Nouveau Continent: fait en 1799, 1800, 1801, 1802, 1803 et 1804 par Al. de Humboldt et A. Bonpland*, 3 vols, Paris, 1814/19/25. (A・フォン・フンボルト『新大陸赤道地方紀行』上・中・下、大野・荒木訳、岩波書店、2001・3年)。翻訳ではこの二章は省略されているが、以後は基本的にこの書からの引用は本訳書を参照し、適宜変更を加える。



図1 カナリア諸島テネリフェ島オロタヴァの竜血樹『アンデス山脈の景観とアメリカ先住民の文化遺産』図版 69. 1810 年



図2 テネリフェ島ティデ山火口『アンデス山脈の景観とアメリカ先住民の文化遺産』図版 54. 1810 年

として確立されたこの「ピクチャレスク」は、もともとイタリア語の「ピトレスコ (pittresco)」に由来し、「画家 (pittor) が描くような」「画家風の」という意味であった。それが転化して「絵のような趣のある」「味わい深い」という語義をもつようになり、そこから「グランド・ツアー」に並ぶ「ピクチャレスク・ツアー」や「ピクチャレスク美学」が生み出されることになったのである。イギリスではギルピン (William Gilpin) やプライス (Uvedale Price) が1780年代から90年代にかけてピクチャレスク美学を定式化するに至った⁴。そこには近代的な美的距離と所有願望を含みつつ風景美学の言説と実践のもつある種の政治性が潜んでいたことは、最近のいくつかの研究によって指摘されている⁵。たとえば、「未開拓の土地へのノスタルジックな愛着」とともに、「土地を絵画のように、各ユニットを組み立てて視覚的に〈パッケージ化〉する」ことが17世紀以来の風景画の伝統とともにひとつの文化実践として定着するようになったという⁶。ともあれ、「ピクチャレスク」な美という自然の捉え方は、「崇高」美の普及に次いで、イギリスだけでなくフランスやドイツでも共有されるようになっていた。

1810年、フンボルトはパリで『アンデス山脈の眺望とアメリカ先住民の文化遺産 (*Vues des cordillères et monuments des peuples indigènes d'Amérique*)』を、69枚の図版を別冊にした二巻セットで出版し、同じ年にドイツ語版のタイトルを『アンデス山脈のピクチャレスクな諸相とアメリカ諸民族の文化遺産 (*Pittoreske Ansichten der Cordilleren und Monumente americanischer Völker*)』としてチュービンゲンでも出版した。別冊図版のなかには、テネリフェ島のオロタヴァという

4 Cf. William Gilpin, *Observations on the River Wye and Several Parts of South Wales, etc. Relative Chiefly to Picturesque Beauty; made in the summer of the year 1770*, London 1782 (in), Uvedale Price, *Essay on the Picturesque, As Compared With The Sublime and The Beautiful*, London, 1794. とくにイギリスでは18世紀末から19世紀にかけてのゴシック小説のなかに展開された風景描写によってもピクチャレスク熱は広まっていった。

5 Cf. Bermingham, Ann, *Landscape and Ideology: the English Rustic Tradition, 1740-1860*, University of California Press, 1986, Pratt, Mary Louise, *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*, Routledge, 1992, Mitchell, W.J.T. (ed.), *Landscape and Power*, University of Chicago Press, 1994, Bohls, A. Elizabeth, *Women Travel Writers and the Language of Aesthetics 1716-1818*, Cambridge UP, 1995 (E・ポールズ『美学とジェンダー 女性の旅行記と美の言説』長野順子訳、ありな書房、2004年)。

6 Bohls, 1995 (ポールズ『美学とジェンダー』第3章)を参照。

地で彼らが目にした樹齢数百年の竜血樹 (le Dragonnier) の姿やティエデ山頂の火口の図も含まれている【図1、2】。そしてこの著作は1814年に、あるイギリス人女性作家によって英訳されている【図3】⁷。図版は19枚にして本文に組み込み、一冊の廉価版としている。彼女の名はヘレン・マライア・ウィリアムズ (Helen Maria Williams)、フランス革命時にイギリスからパリに移住してその報告を故国に送り続けたが、革命共鳴者であったがゆえにその後の混乱で投獄されたりしながらもそのままフランスにとどまり、翻訳等の文筆活動を続けていたのである。翌1815年には彼女は、フンボルトの『新大陸赤道地方紀行』も英訳している⁸。熱帯の奥地の珍しい動植物からそこに住む人々の慣習までが生き生きと表現されているこの魅力的な旅行記の訳者序文のなかで、彼女は次のように述べている。

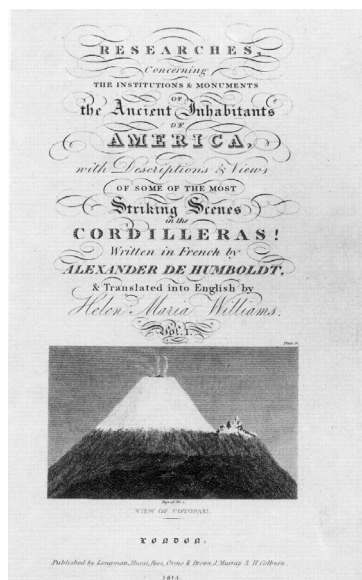


図3 『アンデス山脈の景観とアメリカ先住民の文化遺産』H. M. ウィリアムズによる英訳 1814年 (表紙絵はコトパクス山)

彼にあっては「自然」研究は、自然の特性の説明や諸問題の解決に向けた冷静な悟性による探究であるだけではなかった、この旅行者のなんと幸せなこと！彼は自然法則を解明する一方で、自然の崇高さに打たれ、いたく熱狂して自然の歩みにしたがう。荘厳ですばらしい景観に囲まれ、あのメランコリックで神聖な孤独のなかであって、感じやすい心のもつ神秘的な共感にはよくわかる声で、自然が語りかけているのだ。⁹

訳者である彼女自身、フランス革命のスペクタクルを叙述するさいに「ピクチャレスク」や「崇高」という形容詞を連発していたことを思い起こすならば、このような高揚感も理解できる。

さて『紀行』の第3章では、ついに南アメリカ大陸の最初の海岸に到着したフンボルトの文章に再び「絵のような」という感嘆の言葉が見られる。

1799年7月16日夜明けに、緑豊かな絵のような海岸が見えた。ヌエバ・アンダルシアの山々が霞に半ば覆われながら、南の水平線を縁取っていた。クマナの町とその城がココヤシの茂みの間にかいま見られた。朝九時に入港する。ラ・コルニャ出港から42日後のことだった。(『紀行』第1部第3章)

最初に引用した文章のなかでの「何か明確にできないもの」とは、自然の壮大さや新奇な対象

7 英訳のタイトルは以下の通り。Researches, Concerning the Institutions and Monuments of the Ancient Inhabitants of America, with Descriptions & Views of Some of the Most Striking Scenes in the Cordilleras! tr. by Helen Maria Williams, London, 1814.

8 英訳のタイトルは以下の通り。Personal Narrative of Travels to the Equinoctial Regions of the New Continent During the Years 1799-1804 of Alexander de Humboldt and Aimé Bonpland, five volumes in six, 1814-21, tr. by H. M. Williams, Philadelphia, 1815.

9 ibid., vol. I, p. vi. 彼女の主著『フランス便り』は全八冊におよび、1790年から96年まで革命の動向を伝えた。Helen Maria Williams, Letters From France, ed. Janet M. Todd (Delmar, N.Y.: Scholars' Facsimiles and Reprints, 1975).

のおびたしさから生まれる何かであって、そうしたなかに彼らは実際に身をおいていたのである。だが、フンボルトの感じとっていたものは、単に視覚的なものだけでなく、ヨーロッパとは全く違う空気感のようなもの、光の強度、大気の組成や気圧、気温、湿度といったすべてであった。それらの数値をさまざまな観測器具によって正確に測定することをフンボルトは自らの任務とするのであるが、同時に自分自身の身体で受け止めた感性的な印象を何とか伝えようとするとき、とりあえず「絵のような」という形容詞を用いるしかなかったといえる。それはもちろん、彼がヨーロッパ人としての感性的伝統を無意識のうちに身につけていたことにほかならない。だが、ここでフンボルトはすでに、伝統的な「ピクチャレスク」の視覚的枠組みとは何か異質なものを見ようとしていたのではないか。それはむしろ、「ピクチャレスク」という語によって平板化されてしまうようなものだったのではないか。長い航海を終えて最初に上陸したヴェネズエラのクマナという土地の第一印象は、次のようなものである。

川に沿って並ぶココヤシの木立が私たちの目を引きつけた。幹の高さは60ピエを超え、周囲の風景を圧している。辺りの野は、イタリアアカマツのように枝を笠の形に広げたカシヤ属、フウチョウソウ属、あるいはオジゴソウ属などの喬木に覆われ、ヤシの羽状の葉が、一点のくもりもない紺碧の空を背景にくっきりとその姿を浮かび上がらせている。太陽は早くも天頂に達しようとしていて、眩い光が大気を満たし、白っぽい丘陵地や、相変わらず穏やかな海の上に降り注いでいた。……光の輝き、鮮やかな植物の色彩、草木の形、多種多様の羽毛の鳥たち、そうしたもののすべては赤道地方の自然の大いなる性格を予告していた。（『紀行』第1部第4章）

きわめて文学的な語り方といってよいであろう。また他の箇所には次のような事例も見られる。気温や湿度の違いによって遠景の見え方や大きさが変化することは、紆余曲折の航海中にもすでに幾度か触れられていた。

山の頂は雲に接し、水蒸気の青みがかった色合いが紺碧の空と混じりあっている。……太陽が大気の下層、海、陸地のそれぞれを熱する際の温度差により、蜃気楼の効果で、島々や岬の先は宙に浮いているように見える。日があるうちは、これらの幻影が刻々と形を変えて目を楽しませ、夕闇が迫ると、宙に浮かんでいた岩の塊は再び下降を始める。太陽はその存在が生物の世界に活気を与えているだけでなく、その光の複雑な屈折によって不動の岩を動かし、砂地に覆われた不毛の平原をも波打たせるかのように見える。（同上）

異郷の自然に圧倒されながらの景観描写においても、その眺望の形態や色彩の特徴に加えて、それらを包みこむ大気の感触や光の変化についての表現がきわめて多い。それが、「絵のような」自然を伝えようとするフンボルトに特有の語り方であるといえる。そしてそれは当然、彼独自の自然の「相貌」や「自然絵画」という構想にも大きく関係してくる。

III. 語りについての反省的意識

最初に引用した文章のなかで注目したもうひとつの特徴は、書き手自身が自分の記述の仕方について反省的であることであった。この箇所はいろいろな要素を含み、フンボルトの他の著作にも見られる特徴的な語り方とともに、その自然研究の独自のあり方をもしている。

南米の多くの植民地の宗主国であったスペイン国家に（資源としての）鉱山調査という名目で許可を得たものの、フンボルトは（母親の遺産のおかげで）どの政府からも援助を受けることなく、純粋に学問的な探査旅行のために入念な準備を行った。時間をかけて何種類もの観測器具を調達し、予めそれらの使用法を十分に習得した上でこの装備一式を船に積み込んだのである。そしてパリに帰還してからは、諸分野の研究者たちと交流しながら、膨大な調査記録を整理し報告することを第一の任務とした。当時パリのアカデミーはヨーロッパで最先端の学問的水準にあり、彼は持ち帰った調査結果の詳しい分析やそれについての議論をもとに次々に著作を発表していった。それらは結局、『新大陸赤道地方旅行』全 30 巻（35 冊 1805-34 年）にまとめられることになる¹⁰。上述の『紀行』も、最終的にはその第 28-30 巻として組み込まれることになった。ほとんどの巻には、詳しい地図や図表とともに博物画や遺跡図など大小の図版が添付されているが、その大半は彼自身のスケッチから画家がまず下絵を描き、それをもとにして版画家が制作したものであった。こうした作業過程のために多くの時間と莫大な費用がかかり、途中で資金が不足してしまうほどであった。

多分野にわたる観測や観察に没頭したフンボルトにとっては、観察された個々の現象や対象についてできるだけ客観的に記述し正確に描写することが最重要な課題であった。したがって観察主体が前面に出てくることは、まず避けるべきであった。そこから、いわゆる旅行記というジャンルに対する距離が生まれてくることになる。つまり、これまで多くの人に好んで読まれてきたコロンブスからブーガンヴィル、クックに至る探検記のような語り方をすることへの躊躇が、彼にはあったのである。それでも周囲の人々に強く促されて『紀行』を書き始めた彼は、その「序論」のなかで自分自身の抵抗感を次のように著している。

そもそもヨーロッパを出発したとき、紀行〔時間の流れに沿った探検記（une relation historique du voyage）〕と呼び慣わされているものは書くまい、純粋に記述的な著作（ouvrages purement descriptifs）で研究調査の成果だけを公表しようと固く決意していたのだった。したがって私は事実を整理はしたが、それは継起的な仕方によってではなく、事実相互の関係によるものであった。……

私の旅行は、諸科学に有益な資料を提供しても、旅日記（un itinéraire）の主要な魅力である様々な出来事物語（le récit）を提供することはほとんどないと私には思っていた。（『紀行』序論）

したがって、たとえ通時的な旅行記という体裁をとっても、通常の見聞記のような形になることはできないことを、彼自身がよく知っていた。そもそも「旅行記の魅力」とは、「読者が目にしたいと願う」「周囲の事象と絶えず接触している探検家の姿」であるにも拘らず、探検家が直面する困難や印象のなかにおのずと表現されるべき「野生の自然や耕された自然」の特徴を正確に

¹⁰ 上記注 1) を参照。

記述することの方にむしろ重点をおくならば、ドラマティックな出来事を物語ることから遠くなる、というのがフンボルトの自己認識であった。またそのことで当然、「構成上のまとまり」や「統一感」が保たれなくなることも、承知していた。結局のところこの『紀行』は旅程の前半までしか叙述することができず、旅日記としては未完のままに終わるのである。

〔近年の旅行において科学的研究が志向されるにつれて〕探検記は過去の特徴であった構成上のまとまりと素朴さを一部失うことになった。多種大量の題材を探検途上の出来事の叙述と結びつけることはもはやほとんど不可能になり、ドラマティックと名づけてもよかった部分は純粹に記述的な断片 (les morceaux) によって置き換えられてしまう。堅実な教養よりも心地よい娯楽を好む多数の読者がこの変化で得るものはない。したがって観測機器や蒐集物のおびただしい装備を引きずって行く者がその行程において彼らの関心を惹くことはほとんどないのではないかと危ぶんでいる。……時間の流れに沿った部分を純然たる学問的記述でしばしば中断したから、私の著作は一層多様な形態をとることになった。私はまず現象を継起した順序で説明し、次にそれらを相互の関係全体の中で考察した。この手法はド・ソシュール氏の旅行記で採用されて成功したものであった。……個人的な出来事のほとんどは削除してしまった。(同上)

1786年にモンブラン登頂を果たして『アルプス旅行記』を出版したスイスの自然科学者オラース・ベネディクト・ド・ソシュール (Horace-Bénédict de Saussure, 1740-99) の語りの手法に、フンボルトは倣おうというのであるが、そのソシュールも、カントが『判断力批判』の「崇高論」のなかで二度にわたって触れているように、サヴォワの農夫の逸話やサヴォワ山中での「寂寞とした悲しみ」について語ることで、多くの読者を惹きつけてきた¹¹。そしてフンボルト自身のこの『紀行』においてもまた、そこに多く見られる観察主体自身の感情表出は、事象に即した興味深い記述とともに、たしかにこの書を魅力的なものにしているのである。しかも、実際にはこの『紀行』だけでなくもっぱら「記述的」な他の著作においても、つまり明示的に学問的なスタイルをとっている数々の著述においても、フンボルトの語りには自分自身の感性で受け止めた全体的な印象を伝えようとする文章が随所に混入している。それが、むしろ彼の科学的観察を豊かなものになっているし、またそれらを純粹に学問的な論考とは異なるものとしているのである。

フンボルトは、1808年にドイツ語で発表した『自然の諸相 (Ansichten der Natur, mit wissenschaftlichen Erläuterungen)』という論集の第一版序論で、自然の感性的享受の可能性とともにその語り方について次のように述べている¹²。

自然を大きく眺望すること、諸力の相互作用を証明すること、熱帯地方の直接の眺めが感受性のある人間に供する喜びを新たにすること、それが私のめざす目的である。どの論考もそれ自体で完結

11 Cf. Horace-Bénédict de Saussure, *Voyages dans les Alpes, précédés d'un essai sur l'histoire naturelle des environs de Genève*, 4 vols. 1779-86. ソシュールのアルプス旅行記のドイツ語訳はまずライプツィヒで1781-88年に全訳、次いで抄訳がベルリンで1789年に出版された (*Nachricht von einer Alpenreise des Herrn von Saussure*)。カントの『判断力批判』でのソシュールへの言及は以下の通り。Immanuel Kant, *Kritik der Urteilskraft*, 1790, B111, 127. カントは『自然地理学講義』第43節でもソシュールの登山中の気圧測定について触れている。

12 Beck, Hanno (hrsg.), *Alexander von Humboldt: Studienausgabe in sieben Bände, Bd. 5 Ansichten der Natur, mit wissenschaftlichen Erläuterungen*, 1989, S.30. (『フンボルト 自然の諸相 熱帯自然の絵画的記述』木村直司編訳、ちくま学芸文庫、2012年) この書からの引用は基本的に訳書を参照し、適宜変更を加える。

した全体を形成すべきであるとともに、同一の傾向がすべての論考に共通して現われ出ていなければならない。自然誌〔博物学〕の対象（naturhistorische Gegenstände）をこのように美的に扱うことには、母国語であるドイツ語のすばらしい力と柔軟性をもってしても構成上の大きな困難が伴う。自然の豊かさは個々の像の積み重ねを促し、まさにそれが絵画のまとまりと全体印象（Totaleindruck）を損ねてしまう。感情や想像力（Fantasie）に訴えながらも、文体はともすれば詩的な散文（eine dichterische Prosa）になってしまうおそれがある……（『自然の諸相』第一版序論 Beck 版全集 Bd.V, S.IX）

「詩的な散文」とは、詩としてのまとまりを欠いた散文的な断片の集積のようなどっちつかずの文体になるということであろう。こうした自己批判を行いつつも、フンボルトはなおも両方を目指そうとする。このあとの文章で彼はこう続ける。

改めるよりも非難されるほうがたやすいこうした欠陥にも拘らず、それでも私の「自然の諸相」が読者に、感受性豊かな感覚が直接に直観すること（unmittelbare Anschauung）のうちに見いだす喜びの一部でも提供できればと思う。こうした喜びは、自然の諸力の内的相互連関への洞察によって増大するであろうから、学問的な注釈と補足をそれぞれの論考に付け加えた。（同上）

この論集は、1806年のベルリン科学アカデミーでの講演をもとにした三篇（「草原と砂漠について」と「オリノコ川の滝について」「植物観相学試論」）をまとめてドイツ語で出版したものである。フンボルトはこの書物を気に入って1826年、1849年と版を重ね、最終的には七篇に増補することになった。そしてそれぞれに付けられた注釈と補足も、本文の長さをはるかに超えて次々に増大していったのである。

たしかに、全体的な自然像を描こうとすればするほど、分化し断片化していく知の集積は膨張し分散したものになっていく。あたかもそれは中心なき知の集散となるかのようである。けれどもそれらはすべて、眼前の自然をそれぞれのアスペクトから表現するものなのだ。自然を観察し観測するためのパースペクティヴは、無限にとりうる。そこには空間的な要素だけでなく時間的な変遷もまた含まれるはずである。眼に見えない諸力の分析や記述によって、言語、数字、グラフ、図式、地図等によって、それらはより正確に理解できるのだが——そしてむしろ直接に見えない方が精密度が増すし、極小、極大の次元に至るまで人間の知覚能力の限度を越えていくことができるのだが——、それでも最終的に「見る」ことをやめることはできない。たとえ眼に見えるだけのものには温度や湿度や匂いや音や肌理のようなものが欠けることになるとしても、そうなのである。

IV. 自然の「相貌」と「自然絵画」

『自然の諸相』のなかのひとつの論考である「植物観相学試論（Ideen zu einer Physiognomik der Gewächse）」における「相貌（Physiognomie）」という語は、ゲーテの友人でもあったスイス人のラヴァーター（Johann Kaspar Lavater, 1741-1801）が1775年頃に提唱した「観相学」から採られたものである。元来それは、人間の顔の外面的特徴を類型化してそこからその内面的性格を類推

するという、当時非常に注目されていた考え方であったが、それをフンボルトは人間から生物一般へ、そして生物個体から植生の類型化へと敷衍したのである。この論考の小冊子は、「植物形態学」を基礎づけたゲーテに贈られた。植物の集合的「相貌」という発想について、フンボルトはゲーテの「原型」という理念を個々の植物の形態に認めながら、さらにそれを敷衍して次のように述べている。

自然を一目で包括的に捉えて、地域限定的な現象を捨象することのできる人は、極地から赤道にかけて、生命を鼓舞する気温の上昇とともに、有機的な力と生命の充溢が次第に増大するのがわかる。しかしながらこのような増大がありながらも、どの地帯にも特殊な美が与えられている。……それぞれの地域は独自の長所のほかにまた、それ特有の性格をもっている。……ちょうど個々の有機体に一定の相貌 (Physiognomie) が認められるように、そして記述的動植物学が言葉の厳密な意味で動植物の諸形態の解剖であるように、どの地帯にもまたそれにもつぱら固有の自然の相貌 (Naturphysiognomie) が存在するのである。(『自然の諸相』『植物観相学試論』Beck 版全集 Bd.V, S.181)¹³

ある地域の「全体の印象」をここではその地域全体の自然の性格を表わす「相貌」と言い換えているのである。そして個別自然記述とは異なる一般的な記述としての「自然の観相学 (die Physiognomik der Natur)」を考えようとするとき、その基本となるのはまず植物である。フンボルトによれば、まさに植物の生態こそがその地域の特徴を表わす第一のものである。その土地に根づいた植生こそが、無機的な自然である土、大気と生物的存在をつなぐ最初の媒体となるのである。

山脈の輪郭、動植物の相貌、空の青さ、雲の形、大気圏の透明さが全体の印象 (Totaleindruck) を引き起こす。とはいえ否定できないのは、この印象を規定する主要なものが植物の表層 (Pflanzendecke) だということである。……〔動物に対して〕植物という被造物は、そのたえざる大きさにより私たちの想像力に働きかける。その量塊によりその年齢が表示され、植物においてだけ、年齢と更新しつづける力の外見が一对になっている。(同上 Beck 版全集 Bd.V, S.183)

「相貌」という概念をなによりも植生全般に適用しようという考えは、すでに、南アメリカから帰還してすぐ 1805 年 1 月のパリ学士院での講演をもとにフランス語で書かれた『植物地理学試論：赤道地方の自然絵画付き；北緯 10 度から南緯 10 度までの測定にもとづく』のなかで提示されていた。フンボルト自身によるそのドイツ語版『植物地理学試論、及び熱帯地方の自然絵画』は、1807 年になって正式の献辞と扉絵とともにゲーテに捧げられた¹⁴。この小著の前半部で

13 *ibid.*, S.181.

14 *Essai sur la géographie des plantes ; accompagné d'un tableau physique des régions équinoxiales, fondé sur des mesures exécutées depuis le dixième degré de latitude boréale jusqu'au dixième degré de latitude australe pendant les années 1799-1803, avec une grande planche en couleur ou en noir*, Paris, 1805-7. ドイツ語版のタイトルは以下の通り。Ideen zu einer Geographie der Pflanzen, nebst einem Naturgemälde der Tropenländer, auf Beobachtungen und Messungen gegründet, welche vom 10ten Grade nördlicher bis zum 10ten Grade südlicher Breite, in den Jahren 1799-1803 angestellt worden sind, von Al. von Humboldt und A. Bonpland., Tübingen, 1807. この著作からの引用文はハンノ・ベック版全集による。Beck, Hanno (hrsg.), *Alexander von Humboldt: Studienausgabe in sieben Bände*, Bd. 1 (Schriften zur Geographie der Pflanzen), Darmstadt, 1989. フランス語版からの日本語訳は前半・後半に分かれて手塚章氏によるものがあるが、ドイツ語版と語句等にかかなりの異同がある。手塚章編『地理学の古典』（『植物地理学試論』、『自然の世界誌の考察範囲と科学的考察方法』『コスモス』I）古今書院、1991、同『続・地理学の古典 ― フンボルトの世界 ―』（『熱帯アメリカ旅行』、『ステップと砂漠』『自然の景観』1、



図4『植物地理学試論、及び熱帯地方の自然絵画』添付図版 1807年(80.3x37cm)

は、パリでの講演にもとづいて、新たに構想された「植物地理学」の概要が述べられる。そして後半部では、添付図版「熱帯地方の自然絵画 (Naturgemälde der Tropenländer)」に描き込まれた諸現象についての詳細な叙述がなされている。著作全体が、これに続く一連の成果報告への導入の役割を果たしていると同時に、添付図版は、彼らの調査旅行のいわばひとつの集大成ともなっている【図4】¹⁵。「自然絵画」と題されたこの図版は、中央の絵のスケールの大きさと一種の異様さで人の目をひきつける。雲のたなびく大空を背景に雪を頂いた円錐形の山が描かれ、その奥の活火山からは噴煙が出ている。アンデス山脈の最高峰(と当時は見られていた)チンボラソ山——1802年6月にフンボルト一行はその山頂近く5,875メートルの地点まで登った——と、その少し北に位置する成層活火山コトパクシ山である。奇異に感じられるのは、山の全容のほぼ真ん中から二つに分かれ、左側は山裾から緑色のグラデーションが描かれているのに対して、右側はまるで人体解剖図のように断面図となり、そこにはびつしりと文字が書き込まれていることである。その文字も水平だけではなく斜めに上がるものや下がるものがあり、ときには曲線を描きながら、山肌を彩る植物の分布を解析しているのである。その絵の両側は細分化された表で囲まれ、そこには海拔高度に応じた気象学をはじめとする分野ごとの詳細な記述がみられる。

私の自然絵画が、一方で多数の事象の一覧表を詳しく研究する人々に新しい予期しなかった考えを生み出しうることを私が望むとするならば、他方でまた、私の企ては人々の想像力 (Einbildungskraft) に訴えかけて、壮大でしばしば恐ろしくもあるが常に恵み深い自然を観照 (Beschaung) することか

「熱帯地域の自然図」) 古今書院、1997。

15 この「自然絵画」については以下も参照。長野順子「アレクサンダー・フォン・フンボルトの自然絵画——自然の断片化と全体へのまなざし」西村清和編著『日常性の環境美学』2章 (pp.25-48)、勁草書房、2012年。

ら生まれる悦びの一部を、彼らに分かち与えることも可能だろうと思う。……このようにして、熱帯の自然の描写は知的好奇心と想像力をともに養い、これまで知的な喜びの豊かな源泉を知らないままにいた人々をも、自然研究へと誘うことができるだろう。

(『植物地理学試論』Beck 版全集 Bd.I, S.71)

ドイツ語版のタイトルには「観察と測定にもとづく (auf Beobachtungen und Messungen gegründet)」という語句が添えられているように、ここでは、各種の機器を用いて観測された科学的データが両脇の図表を埋めている。気温、湿度、気圧、光の屈折度、水の沸点等々は高度ごとの数字で表わされ、大気の化学的組成や地質学的特徴や動植物の生息等は詳細な記述によって説明される。さらには画像のなかにも、高度に沿ってモンブランをはじめとする他の地方の高山の名称が細かい文字で書かれており、フンボルトのまなざしがすでに、赤道地帯をひとつの基準点として地球全体へと広げられていたことがわかる。そして唯一写実的に描かれたチンボラソ山の半分の断面図には、植生の分布がさまざまな字体で書き込まれている。これは決して、通常の意味で「美しい」とはいえないだろう。自然の「風景」としてみるならば、むしろ奇異な眺めとすらいえるかもしれない。ここには(機器や記号を媒介した)間接的なしかし正確な自然把握とともに、さらに自然についての直接的経験をも再現しようとする試みが見られる。もはやひとつのもののやひとつの aspekto のみに焦点を絞って描くのではなく、その相貌の全体を描こうとする複合的な手法の試みがここにある。たしかにそこに描かれた山の姿と大気のたたずまいは、ヨーロッパ人がこれまで見たことのないようなある異様さを放っているとしかいいえない。そこにはいわゆる「美しい風景」などない。そうした静的な自然の一瞬の姿ではなく、「全体印象」を形成している「諸力の相互作用」をも包括的に捉えること、それをフンボルトはこの奇妙な異種混合体のような「絵画」で最終的にめざそうとしたのであり、それはまさに「自然」全体を生かしている動的な力の統一の連関を身体全体で感じることにつながるのである。動的でダイナミックな自然の現実そのものを一挙に直観的に表現しようとしたこの「自然絵画」は、C. アルベースの言うような「自然の絶え間ない創造活動を美的(感性的)に再現しようとする試み」¹⁶として、むしろ通常の意味での「美」を超えてた何か、むしろ不気味ささえも秘めた何かを全感覚的に感受させるようなものであったといえないだろうか。

(神戸大学人文学研究科教授：ながのじゅんこ)

16 Cf. Albes, Claudia, „Getreues Abbild oder dichterische Komposition? Zur Darstellung der Natur bei Alexander von Humboldt“, in C. Albes u. Christiane Frey(Hrsg.), *Darstellbarkeit : Zu einem ästhetisch-philosophischen Problem um 1800*, Würzburg, 2003.